

学部 研究科	リハビリテーション学部 理学療法学科		
授業科目名	運動学Ⅱ	担当教員名	小澤 敏夫・原 和子・酒向 俊治
学年 開講時期	1年次 後期	授業の方法	講義
単位数	1単位	必修/選択	必修
授業の概要	人間の身体的構造や、各器官組織の生理的、生化学的反応を理解した上で、実際の人間の運動、行動への応用について理解する。解剖学、生理学に加え、力学を中心にした運動法則に基づいて人間の体における基本的な運動から応用された動作や行為にいたるまでの仕組みを理解する。人間の運動を構造的、立体的に理解し、姿勢制御や運動学習といった神経生理学的な観点からも、運動がどのように行われ、学習されているのか、その理解を深める。また、運動療法の効果や日常生活活動の分析などを学ぶ。		
到達目標	身体運動の仕組み、日常生活の行為について基礎的な専門用語を用いて説明できる。 実習課題についてレポートにまとめることができる。		
授 業 計 画			
回数	授業テーマ	授業内容	
第1回	オリエンテーション	レポートの作成方法、グループでの学習、発表方法	
第2回	下肢帯と下肢の運動(1)	股関節の運動	
第3回	下肢帯と下肢の運動(2)	膝関節の運動	
第4回	下肢帯と下肢の運動(3)	足関節の運動	
第5回	上肢帯と上肢の運動(1)	肩複合体の運動学、肩甲上腕リズム	
第6回	上肢帯と上肢の運動(2)	肘関節、前腕の運動学	
第7回	上肢帯と上肢の運動(3)	手関節、手指の運動学	
第8回	体幹の運動学	脊柱、体幹の運動学	
第9回	姿勢と歩行	姿勢、正常歩行と異常歩行、走行	
第10回	歩行周期と筋活動、重心移動	通常歩行の観察、分析体験する	
第11回	歩行分析：応用歩行	応用歩行の観察、分析体験する	
第12回	運動発達	発達と発達分析	
第13回	運動学習	運動学習の種類と諸理論	
第14回	運動とエネルギー供給	運動時のエネルギー代謝と運動処方	
第15回	まとめ、ポートフォリオ作成	グループ発表、質疑応答、ポートフォリオ作成	
テキスト・参考書	教科書：「基礎運動学」中村隆一（医歯薬出版）ISBN 978-4-263-21153-3 参考書：「臨床運動学」中村隆一（医歯薬出版）ISBN 978-4263211342		
学修方法	事前に教科書の指定範囲をよく読み、実習の目的・準備・手順・結果のまとめ方・考察のポイントについて理解し、実習当日の説明の際、不明な点について質問する(30分程度)。実習後は結果のまとめを速やかに行い、レポート作成にとりかかる(1時間程度)。		
評価方法	小テスト（20％）、定期試験（筆記試験）80％		
オフィスアワー	水曜日 16:10～17:00		
備考・履修条件	欠席をしないように心がけてください。		

学部 研究科	リハビリテーション学部 理学療法学科		
授業科目名	地域包括ケアシステム論	担当教員名	小島 誠
学年 開講時期	1年次 後期	授業の方法	講義
単位数	1単位	必修/選択	必修
授業の概要	超高齢社会のわが国において、誰もが住み慣れた地域で生活し続けるためには地域包括ケアシステムの構築が急がれる。リハビリテーション専門職に求められる役割は多岐にわたり、病院や施設と地域の連携、地域ケア会議、多職種連携した各種取り組みの実践、総合事業をはじめ、その範囲は地域における自助と互助の強化に向けたマネジメントにも及ぶ。地域包括ケアシステムの誕生背景と概要を含め、各役割の種類と重要性を学び理解する。		
到達目標	1 地域特性を把握する視点を述べられる。 2 地域特性（地域のニーズ）に応じた地域包括ケアシステムの在り方について述べられる。 3 地域包括ケアシステムのなかで医療におけるリハビリテーションの在り方および連携について説明できる。 4 生活支援のための介護保険サービスにおけるリハビリテーションの提供について理解する。		
授 業 計 画			
回数	授業テーマ	授業内容	
第1回	地域包括ケアシステムの概念	地域包括ケアシステムとは何か、その歴史。その中でのリハビリテーションの役割を理解する。	
第2回	健康維持と障がい予防、介護保険サービス	生活支援のための介護保険サービスにおけるリハビリテーションの提供について理解する	
第3回	退院前の多職種連携	保健医療福祉政策の過程について理解する。	
第4回	地域包括ケアシステムにむけた在宅生活における多職種連携	在宅における多職種連携について理解する。	
第5回	ケアマネジメントの概念と役割	ケアマネジメントにおける多職種の役割、連携について理解する。	
第6回	ケアマネジメントの過程を個別支援計画	ケアマネジメントの過程について理解する。	
第7回	ケアマネジメントの実際1	地域における自助と互助の強化に向けたマネジメント（個別支援計画）を理解する。	
第8回	ケアマネジメントの実際2	障がい者の地域生活に必要な生活支援を自ら考える。	
テキスト・参考書	教科書：プリント配布 参考書：適宜紹介する		
学修方法	各テーマについての講義を行う。講義にはプリントとスライドを使う。		
評価方法	授業の進行状況に応じて適宜行う小テストの成績（20％）、定期試験成績（80％）		
オフィスアワー	月曜日 16:10～17:00 研究室		
備考・履修条件	出席回数が開講回数の3分の2に達しない者は評価対象外とする。		

学部 研究科	リハビリテーション学部 理学療法学科		
授業科目名	理学療法学概論	担当教員名	小澤 敏夫
学年 開講時期	1年次 後期	授業の方法	講義
単位数	2単位	必修/選択	必修
授業の概要	理学療法学概論では、理学療法とは何か、理学療法の役割、理学療法に必要な知識や主たる対象、更には理学療法が病期のどの段階で必要となるか、職業人としての理学療法士の職域などを学習する。本科目は1年時受講のため、今後の学習意欲を上げるため具体的な事例を紹介しながら理学療法の全体像をつかむだけではなく、理学療法の奥深さまたはやりがいを知り各自が理想の理学療法士像をイメージできるようにする。初回からの数回にわたり各自が理想の理学療法士像をイメージし、その理学療法士を目指していく中で、今後の学内での体系づけられた学習計画を理解しさらに自己研鑽し学習への意欲を高める。		
到達目標	①理学療法の定義を理解し説明できる。 ②様々な分野で行われている理学療法をイメージできる。 ③今後の理学療法のあり方や可能性について自分の考えを述べられる。 ④主たる対象の疾患や職域がどのようなものであるかを理解する。		
授 業 計 画			
回数	授業テーマ	授業内容	
第1回	理学療法の概要とリハビリテーションにおける理学療法士の役割	理学療法の定義と概要、理学療法とリハビリテーションの関係理学療法士に求められる人間性について理解する。	
第2回	理学療法の背景（障がいの概念分類保険制度）	障がいのとらえ方、障がいの受容、保険制度について理解する。	
第3回	理学療法の背景（歴史法律職業倫理理学療法士協会）	理学療法の歴史、理学療法士及び作業療法士法、日本理学療法士協会について説明できる。	
第4回	理学療法の構成	運動療法、物理療法、障害分類、理学療法の流れについて理解する。	
第5回	理学療法に必要な知識～教育課程について～	理学療法士作業療法士学校養成施設指定規則、カリキュラム、学習科目について理解する	
第6回	理学療法の主対象（中枢神経系）	主な中枢神経系疾患の病態と理学療法介入の目的と内容を理解する。	
第7回	理学療法の主対象（運動器系）	主な運動器系疾患の病態と理学療法介入の目的と内容を理解する。	
第8回	理学療法の主対象（内部疾患系）	主な内部疾患系疾患の病態と理学療法介入の目的と内容を理解する。	
第9回	理学療法の主対象（がん・介護予防系）	主ながんの病態と理学療法介入の目的と内容を理解する。介護予防における理学療法介入の目的と内容を理解する。	
第10回	急性期の理学療法	急性期における理学療法の特徴、介入の目的を理解する。	
第11回	回復期の理学療法	回復期における理学療法の特徴、介入の目的を理解する。	
第12回	生活期（維持期）の理学療法	生活（維持）期における理学療法の特徴、介入の目的を理解する。	
第13回	在宅における理学療法の役割	在宅における理学療法の特徴、介入の目的を理解する。	
第14回	行政における理学療法の役割	行政における理学療法の特徴と目的を理解する。	
第15回	研究活動における理学療法の役割	大学、研究所、企業における理学療法の特徴と目的を理解する。	
テキスト・参考書	教科書：理学療法概論（中山書店）石川朗総編集		
学修方法	各テーマについての講義を行う。講義には教科書に加えてプリントとスライドを使う。		
評価方法	授業の進行状況に応じて適宜行う小テストの成績（20％）、定期試験成績（80％）		
オフィスアワー	月曜日 16:20～17:20 研究室		
備考・履修条件	出席回数が開講回数の3分の2に達しない者は評価対象外とする。遅刻早退については学則に準じる。		

学部 研究科	リハビリテーション学部 理学療法学科		
授業科目名	表面解剖学	担当教員名	酒向 俊治
学年 開講時期	1年次 後期	授業の方法	講義
単位数	2単位	必修/選択	必修
授業の概要	体表にあらわれた骨、表在の筋、腱、静脈、動脈は、理学療法の検査時における基本的な指標となり、その注意深い観察と触診は病的変化をするためには重要な手掛かりとなる。本講義では、生体観察としての表面解剖学を系統的に講義し、理学療法技術を高めるための知識と表面解剖を学習する。生体に付したランドマークや筋の触診は治療技術に反映されるため、理学療法治療方法へつながり講義形式でもあるが触診などの実技を交えて講義する。		
到達目標	① 骨・関節・靱帯・筋の名称および構造を説明できる。 ② 筋骨格系の機能を説明できる。 ③ 筋骨格系の各部触察を実施できる。 ④ 筋骨格系と運動力学との関連を説明できる。		
授 業 計 画			
回数	授業テーマ	授業内容	
第1回	オリエンテーション・総論	オリエンテーションと総論から、講義の流れや筋骨格系の触診の重要性、基本知識を理解する。	
第2回	骨関節の構造と機能・触診①	頭蓋骨・脊柱・寛骨の構造・周辺関節機能を理解し、体表から骨触診を実施する。	
第3回	骨関節の構造と機能・触診②	肩甲骨・上腕骨の構造・関節機能を理解し、体表から骨触診を実施する。	
第4回	骨関節の構造と機能・触診③	前腕骨・手根骨の構造・関節機能を理解し、体表から骨触診を実施する。	
第5回	骨関節の構造と機能・触診④	大腿骨・膝蓋骨の構造・関節機能を理解し、体表から骨触診を実施する。	
第6回	骨関節の構造と機能・触診⑤	下腿骨・足根骨の構造・関節機能を理解し、体表から骨触診を実施する。	
第7回	靱帯の構造と機能・触診①	上肢の靱帯の構造と機能を理解し、体表から主要な靱帯触診を実施する。	
第8回	靱帯の構造と機能・触診②	体幹・下肢の靱帯の構造と機能を理解し、体表から主要な靱帯触診を実施する。	
第9回	筋の構造と機能・触診①	頭部・体幹筋の走行・支配神経を理解し、体表から筋触診を実施する。	
第10回	筋の構造と機能・触診②	上肢筋の走行・支配神経を理解し、体表から筋触診を実施する。	
第11回	筋の構造と機能・触診③	上肢筋の走行・支配神経を理解し、体表から筋触診を実施する。	
第12回	筋の構造と機能・触診④	上肢筋の走行・支配神経を理解し、体表から筋触診を実施する。	
第13回	筋の構造と機能・触診⑤	下肢筋の走行・支配神経を理解し、体表から筋触診を実施する。	
第14回	筋の構造と機能・触診⑥	下肢筋の走行・支配神経を理解し、体表から筋触診を実施する。	
第15回	筋の構造と機能・触診⑦	下肢筋の走行・支配神経を理解し、体表から筋触診を実施する。	
テキスト・参考書	参考書：林典雄 他：運動療法のための機能解剖学的触診技術上肢 下肢・体幹改訂第2版 メジカルビュー社 参考書：中村隆一 他：基礎運動学 第6版 医歯薬出版		
学修方法	各テーマについての講義を行う。講義には教科書に加えてプリントとスライドを使う。		
評価方法	授業の進行状況に応じて適宜行う小テストの成績（20％）、定期試験成績（80％）		
オフィスアワー	水曜日 16:10～17:00 研究室		
備考・履修条件	出席回数が開講回数の3分の2に達しない者は評価対象外とする。		

学部 研究科	リハビリテーション学部 理学療法学科		
授業科目名	理学療法評価概論	担当教員名	酒向 俊治
学年 開講時期	1年次 後期	授業の方法	講義
単位数	1単位	必修/選択	必修
授業の概要	理学療法評価は、患者が抱える障害や問題の把握について問診や理学的所見などを通じて得る手段として極めて重要である。これらの情報は整理され、問題点を分析して理学療法における治療方針や治療内容を決定する。また、臨床では実施する検査を選択するにあたり他医療職や患者本人から得られる情報は重要である。本講義では医学情報の収集や医療面接、理学療法検査における検査について学習し、1つ1つの評価結果といくつかの評価結果を統合し患者像をとらえなくてはならない重要性を理解する。さらに、得られた評価結果が機能障害、能力障害、社会的な障壁等の患者の全体像をみるうえで必要不可欠であることを学ぶ。		
到達目標	理学療法評価の流れを説明できる。 医療面接について説明できる。 理学療法検査について説明できる。		
授 業 計 画			
回数	授業テーマ	授業内容	
第1回	総論：理学療法評価とは	評価の意義・目的・過程	
第2回	一般的評価事項	医学情報、医療面接、問診	
第3回	バイタルサイン	意識状態、心拍、血圧、呼吸、体温、経皮的酸素飽和度	
第4回	形態測定	四肢長、周径	
第5回	関節可動域測定	関節可動域測定の意義、留意事項、臨床応用	
第6回	筋力検査	筋力検査の意義、留意事項、臨床応用	
第7回	疼痛、知覚検査、反射	疼痛とは、知覚とは、知覚検査、深部腱反射、病的反射	
第8回	筋トーヌス検査	筋トーヌスの異常、検査方法	
第9回	整形外科疾患検査	整形外科テスト	
第10回	運動発達検査、姿勢反射検査、バランス検査	運動発達検査とは、各統合レベルによる姿勢反射、バランス検査	
第11回	筋協調性検査、片麻痺機能検査	失調とは、共同運動と連合反応、分離運動、各検査	
第12回	脳神経検査	脳神経検査の意義、検査方法	
第13回	高次脳機能検査	失行・失認・失語・認知症	
第14回	電気生理学的検査	強さ-時間曲線、筋電図検査、末梢神経伝導検査	
第15回	呼吸循環器疾患検査	呼吸機能検査、心電図と循環機能検査	
テキスト・参考書	教科書：田崎義昭他『ベッドサイドの神経の診かた 第18版』南山堂 松澤正『学療法評価学 改訂第6版』金原出版 津山直一 訳『新・徒手筋力検査法 原著第9版』協同医書出版 参考書：必要に応じてプリントを配布		
学修方法	各テーマについての講義を行う。講義には教科書に加えてプリントを使う。		
評価方法	授業の進行状況に応じて適宜行う小テストの成績（20％）、定期試験成績（80％）		
オフィスアワー	水曜日 16:10～17:00 研究室		
備考・履修条件	出席回数が開講回数の3分の2に達しない者は評価対象外とする。		

学部 研究科	リハビリテーション学部 理学療法学科		
授業科目名	臨床実習Ⅰ（基礎）	担当教員名	酒向・高橋・石塚・鈴木・青木
学年 開講時期	1年次 後期	授業の方法	実習
単位数	1単位	必修/選択	必修
授業の概要	臨床実習施設での見学を通して、医療や社会の中での理学療法士の役割と責任を学ぶ。見学による対象者とのコミュニケーションや臨床実習教育者（臨床教育者）の指導から、これまで学んだ基本的知識と疾患、障害像との繋がりを深め、障害の多様性を理解するきっかけとする。臨床教育者、対象者、多職種とのコミュニケーションを通じて、専門職としてふさわしい学びの姿勢、接遇態度を学ぶ。臨床実習終了後には、実習で学んだ内容をまとめ考察することで、これ以降の専門科目を通じての知識習得を、より効果的かつ有意義に行えるよう学習する。		
到達目標	実習施設内での理学療法科の位置づけ、多職種との連携業務の流れ、理学療法士の業務内容を理解できる。疾病・障がいを持つ対象者とのコミュニケーションを通して、基本的知識・技術・態度を学び、理学療法士として必要な資質について理解できる。対象者や医療スタッフ等と良好なコミュニケーションを取ることができる。		
実習方法	1）実習施設は、岐阜近隣の病院、介護老人保健施設等を使用する。 2）学生は原則1施設当たり1～2人に分かれて実習する。 3）学生1人当たりの実習期間は、5日間の集中実習とする。（実習計画は以下のとおり）。 4）実習開始前にガイダンスを含めた指導を学内で行う。 5）実習終了後、実習施設での経験内容についてディスカッションを行う。 6）実習内容は、次のとおりとする。 （1）社会人としての適切な態度の理解と実施。 （2）医療施設、福祉施設におけるリハビリテーション部門の概要と理解。 （3）医療従事者の役割や業務の流れの理解。 （4）医療従事者の患者との関わり方の理解。 （5）守秘義務、個人情報保護の理解・実施。		
実習計画および学習課題			
週	曜日	内容	
第1週	1日目	オリエンテーション、臨床見学、標準予防策等のリスク管理指導、報告書作成等の課題。	
	2日目	関連職種見学、臨床見学、報告書作成等の課題。	
	3日目	他部門見学、関連職種見学、臨床見学、報告書作成等の課題。	
	4日目	関連職種見学、臨床見学、報告書作成等の課題。	
	5日目	関連職種見学、臨床見学、報告書作成等の課題、指導者総括。	
テキスト・参考書	才藤栄一監：PT・OTのための臨床技能とOSCE コミュニケーションと介助・検査測定編 第2版 金原出版		
評価方法	出席20%、提出物20%、実習報告会50%、評価表20%		
留意事項 （履修条件他）	1年次配当の必須科目をすべて履修していることを本科目の履修要件とする。 1）実習期間は全出席に努めること。 2）実習前のガイダンスや実習前評価、実習後の実習経験報告会は本科目履修に非常に重要なため欠席を認めない。 3）実習経験報告会は聴講者の聴講態度や質問内容、積極性も評価対象となるため意欲的に臨むこと		

学部 研究科	リハビリテーション学部 理学療法学科		
授業科目名	実践力演習Ⅰ	担当教員名	高橋・石塚・鈴木・青木
学年 開講時期	1 年次 後期	授業の方法	演習
単位数	1単位	必修/選択	必修
授業の概要	医療職は患者、患者の家族、他医療職との関係を築くために礼節、医療職としての知識が不可欠となる。独自の領域においてそれぞれ専門職としての知識と判断力・実践力を必要とする。本講義ではアクティブラーニングを主体とし、グループディスカッションすることにより、礼節、医療面接技術、基礎的な医学用語、医療チームとしての理学療法士について学ぶ。これらの知識を習得するために医学を学ぶ学生として必要な知識を書籍から読み取る力を学ぶ。また集団の中で様々な役割を持ち、集団活動が円滑に進み集団としての意見をまとめレポートの作成、プレゼンテーションに結びつける手法について学ぶ。		
到達目標	医学を学ぶ学生として必要な読解力、引用力、プレゼンテーション作成方法を実践できる。 リハビリテーション、特に理学療法に関する基礎的な医学用語を使用し説明できる。 医療職としての理学療法士について説明できる。 命と向き合う職種としての危機管理の意味を理解する。		
授 業 計 画			
回数	授業テーマ	授業内容	
第1回	オリエンテーション・レポートの書き方	本講義の進め方についてオリエンテーションを行う。またレポートの書き方についてフィードバックを受けながら学習する。	
第2回	グループディスカッション	大学4年間の学びについてグループディスカッションを行い大学生活の基盤となる考え方を学ぶ	
第3回	理学療法的思考①	理学療法士とのディスカッションを通じて理学療法に関する思考について学習し、レポートとしてまとめていく。	
第4回	理学療法的思考②		
第5回	理学療法的思考③		
第6回	臨床技能の概要と心構え	臨床で求められる知識や技能に関する概要と心構えについて学習する	
第7回	標準予防策とリスク管理	臨床場面で必要とされる標準予防策とリスク管理の知識・技術を学習する。	
第8回	コミュニケーション技法	患者等とのラポール形成や情報収集に必要なコミュニケーション技法に関する知識・技能を学習する。	
第9回	ホットパック実施の補助	臨床で最も用いられる温熱療法のひとつであるホットパックの作用、適応と禁忌、補助方等の知識・技能を学習する。	
第10回	上肢管理（三角巾等の装着）	麻痺や外傷後の二次的合併症の予防等に必要な上肢管理に関する知識・技能を学習する。	
第11回	下肢装具の装着介助	装具の定義と下肢装具の目的、および代表的な下肢装具の種類とその装着介助に関する知識・技能を学習する。	
第12回	車椅子の駆動介助	理学療法士が日常的に実施する車椅子の駆動補助の方法とリスクに関する知識・技能を学習する。	
第13回	移乗介助	ベッドから車椅子、車椅子からトイレ等といった、目的や場面別の移乗動作の介助方法に関する知識・技能を学習する。	
第14回	知識と技能の確認	第7-13回までに学習した知識・技能の習得状況を確認し、自他によるフィードバックを得る機会とする。	
第15回			
テキスト・参考書	監修 才藤栄一：PT・OTのための臨床技能とOSCE - コミュニケーションと介助・検査測定編-第2版補訂版		
学修方法	各回に定めた知識・技能を習得するために演習形式にて実施する。		
評価方法	OSCE（50％）、レポート（50％）		
オフィスアワー	水曜日 12:10～13:00 研究室		
備考・履修条件	他者と協調し積極的に取り組むこと。 出席回数が開講回数の3分の2に達しない者は評価対象外とする。		